

〔本調子〕 傘さして

濡れに廊の夜の雨

店清搔に声添ふる、鐘は上野か浅草に、其の名も伊達な花川戸

此の鉢巻の紫は、由縁ぞかかる藤波の、洗ふて千代の色まさる

松の刷毛先つき額、堤八丁衣紋坂通ひ馴れたる塗鼻緒、ひとつ印籠ひとつ前、二重廻りの雲の
帯、さした尺八鮫鞘は、これ御存知の出立ちばえ

〔三下り〕 せくなせきやるな浮世は車さよへ

めぐる月日が縁となる、めぐる月日が縁となる

恋の夜桜浮気を通ふ

間夫の名とりの通りの者、喧嘩じかけや色じかけ、力づくならなに手管なら、流儀流儀で

向ふづら

ただは通さぬ大門を

また潜るとは命がけ

土堤節をやめよ編笠を、とつて投げるは曲がない、蹴込んで見せう楼船、こりや

又なんのこつた江戸の花

富士と筑波の山間の袖なりゆかし君ゆかし

しんぞ命をあげ巻の、これ助六がまへわたり、風情なりける次第なり